吉備津の釜：命名についての報告

清田啓子

『雨月物語』に登場する人物の名は、歴史的な実在人物のちられたものであること、架空の人物についても、従来それぞれ典拠、出所が考証されてきた。主人公の名に限って言えば、五巻九篇のうち『白壁』、『夢の鯉魚』、『仏法僧』、『高頭巾』、『貧福論』、『一心婆娑人物をかりていてのれど、まずおの歴史物語にやや拘束されているのを除けば、他の三篇、すなわち、宮本、磯良、真女児という三人の女性には、作者が作品の意図を現現させよう、ふさわしい名が自由に選ばれたはずである。

洋氏著『雨月物語評釈』には、磯良は一説に醜貌の魚をいい、磯良は一般の女性、磯良、真女児、真女児、とあらのみで、また、石穴に言及されているとはいない。

わたしたちは、吉備津の釜は、日本の民俗劇と人形芝居の系譜を鑑賞し、古要神社の傀儡子の舞のうち、磯良の神を発見し、奇異の感にうたれた。そして少し調べてみると、磯良伝説とも言えるものほどの名が必要であると考えた。磯良の名は、秋成の親しんだ『本朝神社考』にも載せられ、神楽歌にでも磯良という名が磯良と似ていると指摘され、また、最近出版の鶴見『吉備津の釜』の磯良（清田）
卷の三の後半であって、卷の二の往言とは隔ており、また吉備津の住吉は、巻の三の後半であることを結びつけるのは唐突すぎるであろう。しかし、少し注意深く読むと、吉備津の往言の記事がまとまっているのに気づく。すなわち、便宜上、目録を写すと、「中之三目録の後半部分（二巻）」と書かれるが（約七丁）、気比以下高良までの六社七丁は、神功皇后関係の記事がまつれているのに気づく。

伝説で占められている『神社考』を読み進めると、吉備に至って想を得、翻訳するうちに神功皇后伝説話に再び行きかい、ひろがって前の住吉、その中の砦良を思い起こす。このような筋道は、どこ自然と思われるのである。

さらに、この六社の中で「砦良」を思い起こさせるのに決定的な役割を果すのは、香椎である。というのは、譜に「香椎」という曲があり、それは砦良（砦の童）をシテとした曲のであった（後述）。そこで、秋成の譜にに対する知識・関心の度からいえば、吉備の後におかげたこの六社グループをなかんづく香椎の名から、特異な神格砦良が思い起こされぬは、「吉備津の釜」の砦良（清田）
「吉備津の釜」の頃（清 四）

すに竜宮を出で、皇后に参らせさせ給けり。彼の豊姬と申すは、川上の大明神の御事、あとへのいそと申すは、筑前国の国にてはかしまの大明神、大和の国にては春日の大明神、一体分身同体異名大明神なり、あらゆるもあらゆる名をてんこめりもとらざるをえぬ。　

「こう神功皇后の、此海上の舞の曲を眼前に見せんと、あひの若者、ふき巻れどもふたつを、ひかりは天にみ、波は鏡を照れ、運ゆる光を照れ、もてなす。舞いは舞い、舞いは舞い。まるくたる海中に、飛び入ると見え、波が底をひつた玉を授けり。曲は千珠といふは白玉、満珠といふは青玉、豊姫と右大臣に持たせ承らせて、日月と申す。」
その大要は、神功皇后が『征討記・異国向拠記』に「礎良が必至なり。高良大明神が迎えに来ぬを示し、礎良は海底に一日居り、石花・ヒョとかがつき、見苦しくなれば、この文句は、相当あららしい跳躍と大きな動きを想ふという指定をこなす。全面推进の言葉は、この段階から同時に（動）という指定からも察せられるわけである。こういうふうに想像できる礎良の動きは、「吉備津の釜」礎良の歩奮い、たけり狂うさまじきに通用するものだと考えられたのだろうか。

「八幡興道記」は、享保五年の奥書をもち、版面に文書四十八年・元禄十一年刊のもののがある。やはり相当流がした書物で、一般に知識を供給した書として考えればならない。内容は神功皇后三幡征討の話に始まり、その子応神天皇なしに八幡大菩薩という縁起が述べられる。その神功皇后説話のうちにかなりのスペースを占めているのが千葉満珠と礎良の話である。

吉備津の釜の礎良（清田）
『考童訓』の神々の奏楽を神楽の登場と断言し、「太平記」神楽の文脈を詳細に述べ、近世期に流行した神楽の変化について述べる。神楽家の役割や性格、楽器の使用など、神楽の実際の様子を描く。

『考童訓』は、神楽の伝統を詳細に述べ、近世期に流行した神楽の変化について述べる。神楽家の役割や性格、楽器の使用など、神楽の実際の様子を描く。
神楽歌の研究史に於て、於と秋成との関係は、於と湯立との関係を、真淵が引出さなかったかということが、元々の『神楽歌考』に於て、著作の時期も相当に、延べたいのは、真淵の注釈から、於と湯立との連関を、秋成が引出さなかったかということである。

しかし、於と湯立については、大同小異の注が付され、於と湯立との関係を、真淵が引出さなかったかということである。於と湯立との関係については、大同小異の注が付され、於と湯立との関係を、真淵が引出さなかったかということである。

以下、いくつかのことも重ねて、この特長異な女性名の撰を湯立に託した、この名を、海神筆良説話の流布から考えて、かわり一般的に知られてきたと考えてよいか。

以上、いくつのかのことも重ねて、この特長異な女性名の撰を湯立に託した、この名を、海神筆良説話の流布から考えて、かわり一般的に知られてきたと考えてよいか。
ここに見世物云々とあるが、朝倉無声氏の『見世物研究』に次の言がある。

元禄期に於ける町人見世物界の人気者は、何と云っても頭
坊雲楽と礁良とであった。（中略）礁良と号けた者人は、総
身に緊と縦めものがあつて、所々に種々の具飾などが取
付き、鼻鼻へ夫と離れ異形の者であったが、口上が編
木で其身体を撫でると、からからと音が出來たという。この
礁良の姿が余りに醜くかったので、當時子供仲間では、例
へ礁良の身に成ること、約束は違へないと言信した程であ
った。

そこでこの見世物者は、『傾城色三味線』の記事から推して、上
方で見せた後、江戸へ下って興行したものの恐るべき
である。このグロテスクな怪物は、神海礁良の醜い容貌を復
活させたものと考えられ、悪意ある香具師の面目躍如たるも
のがある。

これら元禄期の例は、市井にひろまり、巷間に伝えられな
がら、明和に至る七八十年という年月を経過したと考えられ
る。同時に正統の伝説も存在し、また春日宮御祭等の祭儀
にも登場する名であったのだから、礁良という名が忘れ去ら
れていたとする事はできぬ。それゆえ、この名は、秋成
が奇をてってつけたものではなく、むしろ、宮木・真女
と同程度の“知名度”をもつものであったと考えるべきであ
場するいきそ（以下「吉備津の釜」）の碁良は仮名書きにする
と碁良とは、純粋な魂をもつものとして本質的には一致す
る。しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、というのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しかしやとの場合は、純粋であるものを、その上に現実
を重ねて生じたもの、いうのには、常には異なる。
しか
言語学や文学の研究者、専門家がその分野での業績を積み重ね、専門的な知識を幅広く持っている。その中でも特に日本の現代文学や古代文学に対する研究が注目を浴びている。彼の研究は、日本の文学の発展史を、専門家たちがどのように捉えているのかを示すものでもある。彼の研究は、文学史の分析を通じて、文化的、社会的な変化の影響を考察するものであり、現代文学の発展を見据えたものでもある。

彼の研究は、日本の文学産業の発展史を、専門家たちがどのように捉えているのかを示すものでもある。彼の研究は、文学史の分析を通じて、文化的、社会的な変化の影響を考察するものであり、現代文学の発展を見据えたものでもある。

彼の研究は、日本の文学産業の発展史を、専門家たちがどのように捉えているのかを示すものでもある。彼の研究は、文学史の分析を通じて、文化的、社会的な変化の影響を考察するものであり、現代文学の発展を見据えたものでもある。

彼の研究は、日本の文学産業の発展史を、専門家たちがどのように捉えているのかを示すものでもある。彼の研究は、文学史の分析を通じて、文化的、社会的な変化の影響を考察するものであり、現代文学の発展を見据えたものでもある。
日本の人形芝居

藤井駿氏『吉備津の釜』の後藤
（清田）

吉備津の釜の模様

昭和九年十二月

四五